昭和の南海地震体験談

氏　　名：松本　壽雄（まつもと　ひさお）
生年月日：大正10年4月8日
地震を体験した場所：日高町・集落の港
当時の家族状況：父、母、祖父、祖母、弟（23）、
妹（21）

1）地震発生時の状況

当時25歳で、トロール船の機関士の仕事をしていた。焼き玉エンジンの為、船を動かせるようになるまで時間がかかり、普通の乗組員よりも1時間早く出勤するのが普通だった。地震の朝も、他の乗組員より早く船に乗ろうと浜に出てきた時だった。急に地面が立っていられない程強く揺れ、座り込んで揺れが収まるのを待った。その時間帯、空はまだ暗いはずだが、焼けたように真っ赤だった。

2）津波襲来時の状況

揺れが収まった後、船に乗り込み作業をしていると、船の海水を吸い上げる所の機械が止まった。不思議に思い海を見ると、潮が引いてしまって、海水が無くなっていた。地震の後に津波が来るという事は思いつかず、また、津波というものも分からなかったので作業を続けた。暫くすると潮がじわじわと増え、少しずつ水位が上がってきた。同時に船も高い位置になり、責任者は乗船できなくなった。周りの浜に上げてあった小船5、60隻がゆらゆら動いて流れてきてトロール船にもたれかかった。その勢いで陸に繋いでいたロープが切れ、引き潮に巻き込まれ、防波堤を飛び越え沖まで流された。沖から港を見ると、右回りに渦をまいていて、「えらい事やな。だいぶ、人、流されたかわからんな」等、話をした。電気を全てつけて、落ち着くまで沖を流していた。はっきりとは判らないが、引いて増えて、津波は3、4回あったと思う。

3）家族の行動・被害

家族は全員高台に避難し、無事だった。昼頃に全員が自宅に戻ったが、床上90cmの所まで濡れた跡があった。畳や家財道具が潮に浸かり、使いものにならなくなった。井戸も使えなくなり、水に困った。食料に不自由は感じなかった。

4）集落・周囲の被害

集落で男児1名と男性1名が亡くなった。男児は父親に抱かれ避難しているところを引き潮に引かれ、流された。父親がその時に手を離してしまい行方がわからなくなった。電気をつけて沖を流していた時、裸で流されていた父親を船に乗せ、助けた。

男性とは地震直後、浜で出会っており、「大きい地震であった」等と言葉を交わしていた。男性は一度帰宅したが、再び浜に戻り、引き潮にさらわれた。港の渦に流されながら、トロール船の責任者の名前を呼び、助けを求める声がしていた。

地震による被害は無く、津波による浸水がほとんどだと思う。土地が低い地域の女性で逃げ遅れたが軒下の板にしがみつき助かった、という人もいた。

5）地震・津波後の生活

井戸に潮が入り使えなくなった。水に不自由したが、食料には困らなかった。片付けながら自宅で生活した。畳は使いものにならなくなり、替えざるを得なくなった。浜辺りの住民は皆、寝起きに不自由したと思う。 仕事に影響は無く、地震の前と後で生活が変わったという事は特に思い当たらない。

6）次の災害への備え

高い堤防があり、地区ごとに避難場所が決まっているので安心だ。